

めぐりあい(その二)

富田 仁

この十年あまり、比較文学の研究から日仏文化交流史の研究の方にむしろウエイトを置くかのような日々を過している。そんな私にとって忘れられない一つのめぐりあいがある。S・M氏とのめぐりあいがある。

昭和四十八年の夏、フランスふたたびの旅に出る前日、私は自由ヶ丘の喫茶店「木馬」で、早稲田大学の先輩であり、恩師佐藤輝夫先生をこよなく尊敬する氏と初めて会った。ちょうど、佐藤輝夫先生の名著『フランス文学の精神』が新装再刊されたので、『図書新聞』で紹介したところ、出版社編集長としてお礼の連絡があり、面会を求めてきたのであった。

同じフランス文学科の先輩・後輩である。年齢も近いので共通の話題もあり、なごやかな時間が過ぎたが、氏はフランスから帰った

ら日仏文化交流史について本を書くようにと、すすめてくれた。いわゆるフランス学研究の分野では、まだこれといってまとまった研究書も出ていなかったもので、私はよるこんで承諾したものの、そのときには別段特別な構想があつたわけではなかった。

別れぎわに、氏は重ねて出版のことを約束してくれた。五十日ほどの日程のフランス滞在で、どれだけの調査・研究を行なうことができるのか心もとなかったが、氏の好意と期待にこたえたいと思い、私の方からも改めて約束をした。

そんなわけで、フランスの日々はあわただしかった。幕末の日仏外交の舞台で、レオン・ロッシュ公使の通訳官として活躍したパリ外国宣教会のメルメ・カション神父の生地をつきとめて、スイスとの国境に近い、ジュラ山

中の寒村レ・ブーシュに足を運び、洗礼記録を調べたあと、カルパントラの図書館で、日本人として最初にフランスを訪れた支倉常長に関する文書を開覧し、コピーしてから、日本に初めてやって来て殉教したギョーム・クール神父の生地セリニヤンの教会堂にエストゥールネ司祭の教えを乞い、司祭館に泊めてもらうなど、効率よいスケジュールでフランス国内を歩いた。

帰国後、早速執筆にとりかかり、翌年春、『佛蘭西學のあけぼの——佛學事始とその背景——』として出版された。この種の類書がなかったためか、さまざまな新聞・雑誌で書評・紹介された。S・M氏のようなこびも大きかったが、私も責任を果したよううれしかった。

この本が出るまでにどれほど氏と会ったこ

とだらう。校正刷の受け渡しのたびに会ううちに、私と氏の間にはたんなる著者と編集者以上の親密な心の結びつきができていった。お酒好きな氏とのつき合いも深め、ときには愚痴も聞かされたが、将来の夢も語り合った。私も次作の構想をあたため、その出版を引き受けてもらい、『フランスに魅せられた人びと——中江兆民とその時代——』を書いた。このときには友人たちが出版パーティを開いてくれ、渋谷の東天紅で九十余名の参加者が集まり、楽しいひとときを過ごすことができた。

この頃がカルチャー出版社の絶頂期だったようで、『アルフォンス・ドーデと近代文学』が出版されたときにはかなり経営が苦しかったらしい。氏は編集長から社長に昇任していたが、実際には編集よりも経営上の問題に頭を悩ませるようになっていた。それでもフランス文学の研究書の出版や、村上英俊の『三語便覧』『佛語明要』『五方通語』などの辞書の復刻を行なうなど、出版人としてはきわめてユニークな活動をしていた。斎藤一寛先生の『フランス演劇発達史』のような大著も手がけるなど、その出版はフランス文学研究者の間から注目されたのだが、ついに経営的

に大きなヒット作を出すことができないまま、破局を迎えなくてはならなかった。ひとたび挫折すると、世間の眼は冷めたい。S・M氏は多くの人びとの指弾を浴び、世間から身を隠すことになった。微力な私はなにもしてあげられなかったことを悔むばかりだった。著者の中には印税の未払いを恨み、氏の悪口を私に告げる者も少なくなかった。私は氏が刑事責任を負わされることのみを心配したが、それもどうやら無事に済んだのを知ったとき、ほっとした。

それから暫くの間、氏とは音信不通の状態が続いたが、二年ほど前のある日、『東京だより』という雑誌に越路吹雪の想い出話を連載し始めたというたよりとともに、掲載誌を送って来た。

その数日後、私は氏と再会した。ある専門学校で編集技術的なことを教えたり、原稿を書いたりして暮らしているが、近くまた出版業に戻りたいという話だった。相変らずお酒の好きな氏であり、出版社の倒産がその人柄を決定的には変えることがなかったように感じられた。

いまでは医事裁判の判例集の出版に携わっているというが、きわめて堅実な経営方針を

貫ぬいているようである。だが、またいつの日か、フランス文学の出版をやりたいという思いは捨てていない。ありがたい情熱であるが、私はやはり心配でならない。私が日仏文化交流史の研究で多少とも仕事ができるようになったのは『佛蘭西學のあけぼの』の出版のおかげである。その編集者であった氏がいままなおフランス文学の出版への夢を抱いていることを感謝する反面、再び失敗して、今度こそ再起不能になることがこわいのである。フランス文学の研究書の出版が採算の合わないものであることを知っているから、氏の夢が不安なのである。研究者にとっては、たしかに氏の出版社の仕事は大きく評価できるものであったが、一方では、経営者としての氏を奈落の底につき落とすかのような営為だったのである。そんな苦勞を二度と氏に味あわせたくない。

本を出すことは著者ひとりのできるものではない。編集者との共同の作業である。だが、出版の成功は著者を有名にするかもしれないが、失敗すると編集者(出版社)に大きな痛手をあたえるのだ。比較の上のことだが、著者の傷つく度合は小さい——。S・M氏のことを思うとき、私は複雑な気持になる。